

檀文彦

伊東豊雄
大西麻貴

建築的冒険者の遺伝子

1970年代から現代へ

キヤクコローエタノ
法政大学名誉教授 藤野 誠
エグチノ・リキ・コリノ

六角鬼丈
宮崎晃吉

坂本一成
能作文徳

北

山

恒

長谷川逸子

大熊克和

建築年表 1968-1991

建築的冒険者たちの海図

一九六八年から一九九一年の日本は、奇跡的な経済発展を実現し、世界的な存在感を示した時代だった。都市は歴史的に富の集中したときに形成される。しかし、日本では富は分割され、個別の建築が「種の爆発」のように出現していた。〔北山恒〕



2



3



1



5



4

●一九六八年までの時代のうねり

1953 Team X 発足

1959 メタボリズム・グループ結成

1960 名古屋大学豊田講堂(横文彦)

『桂日本建築における伝統と創造』丹下健三ほか

『第一機械時代の理論とデザイン』R・バンハム

1961 ベルリンの壁構築

アーキグラム結成

東京文化会館(前川國男)

東京計画1960(丹下健三) ①

『日本の民家』二川幸夫・伊藤ていじ

『アメリカ大都市の死と生』J・ジェイコブズ

1962 『沈黙の春』R・カーソン

1964 東京オリンピック

『建築家なしの建築』展覧会(MOMA)

東京カテドラル聖マリア大聖堂(丹下健三)

国立屋内総合競技場(丹下健三) ②

ホテル東光園(菊竹清訓) ③

『形の合成に関するノート』C・アレグザンダー

1965 『都市はツリーではない』C・アレグザンダー

1966 白の家(篠原一男) ④

パレスサイドビル(林昌二・日建設計)

塔の家(東まき光) ⑤

『都市の建築』A・ロッシ

『建築の多様性と対立性』R・ヴェンチュリ

円相場(1ドル/円)

市街地価格指数
(六大都市*全用途
各年9月末の
対前年変動率)

日経平均株価(円)

凡例

『』:書名・雑誌名 「」:論考タイトル 海外文献は原著の刊行年を示した。

太字:建築名 ():設計者名 青字:海外の動向・文献 藍字:世界情勢

*六大都市=東京区部、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸



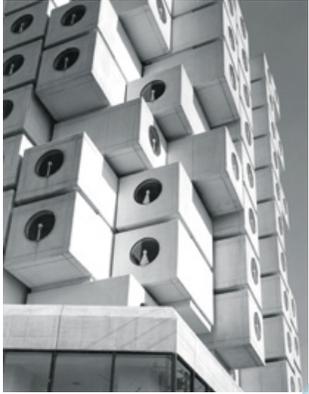
8



11



13



12



6



10



2



1



9



4



5



3



7

1968

『バブル革命』

- 1 坂出人工土地 (大高正人)
- 2 霞が関ビルディング (三井不動産十山下寿郎)
- 3 クレバスの家 (六角鬼丈)
- 『都市住宅』創刊 (編集長・植田実)
- 『日本の都市空間』都市デザイン研究体
- 『Whole Earth Catalog』創刊

1969

- 4 ヒルサイドテラス第1期 (横文彦)
- 5 散田の家 (坂本一成)
- 6 国立近代美術館 (谷口吉郎)
- 『建築の解体』磯崎新『美術手帖』連載開始
- 『代謝建築論か・かた・かたち』菊竹清訓
- 『環境としての建築』R・パンナム
- 『デザイン・ウィズ・ネーチャー』I・マクハーグ

1970

- 7 桜台コートビレジ (内井昭蔵)
- 8 セキスイハイムM1 (大野勝彦)
- 『住宅論』篠原一男
- 9 大阪万博・お祭り広場・丹下健三ほか
- 10 水無瀬の町家 (坂本一成)

1971

- 11 未完の家 (篠原一男)
- 12 福岡相互銀行東京支店 (磯崎新)
- 13 アルミの家 (伊東豊雄)
- 14 ブルーボックスハウス (宮脇檀)
- 15 松川ボックス (宮脇檀)
- 16 福岡相互銀行本店 (磯崎新)
- 17 『空間へ』磯崎新 (美術手帖) 連載開始

1972

- 18 焼津の住宅1 (長谷川逸子)
- 19 中銀カプセルタワービル (黒川紀章)
- 20 反住器 (毛綱毅曠)
- 21 『神殿か獄舎か』長谷川堯
- 22 『ラスベガス』R・ウェンチュエリ
- 23 『成長の限界』ローマ・クラブ

1973

青山南町の住宅 (富永謙)

1973.10～
第1次オイルショック

1973.4～
変動為替相場制

1971.08.15～
ニクソンショック

日経平均株価 (円)

建築的冒険者の遺伝

1970年代から現代へ

キヤノコーポレーション
法政大学大塚下小工務部建築設計
元 井ノ上・カネ・ガリオン 編

彰国社



建築年表
1968-1991

建築的冒険者たちの海図 1

はじめに

1968 / 1970 - 1989 / 1991 北山恒 13

キーノート

漂うモダニズムと私 槇文彦 20

I 建築家と建築空間の変遷 22

II 共感のヒューマニズムを求めて 28

III アナザー・ユートピア 35

IV コミュニティを生み出す外部空間 38

V 建築家のこれから 49

トークセッション 53

レクチャー1

愛される建築をめざして 伊東豊雄×大西麻貴 62

「台中国家歌劇院」を語る 伊東豊雄 64

愛される建築とは 大西麻貴 76

トークセッション 83

レクチャー2

日本“建築”辺境論 六角鬼丈×宮崎晃吉 106

住宅から都市への広がり 六角鬼丈 108

形だけではない建築 宮崎晃吉 126

トークセッション 135

レクチャー3

建築のエシックス 坂本一成×能作文徳 150

一九七〇年代からの設計手法 坂本一成 152

建築をネットワークで捉える 能作文徳 165

トークセッション 173

第二の自然としての建築とアジアの建築

長谷川逸子×大熊克和

196

インクルーシブな建築空間と自然 長谷川逸子 198

東南アジアの自然を活かした建築と教育活動 大熊克和 216

トークセッション 224

おわりに

平成の野武士たち 長谷川逸子 234

再録

漂うモダニズム 榎文彦 242

略歴 239

クレジット 241

デザインII 水野哲也 (Watermark)

1968 / 1970 - 1989 / 1991

北山恒

一九七〇年代から八〇年代、日本では若手建築家による建築的冒険がふつと湧き出た。それは、西欧文明から発したモダニズム運動への抵抗のようであり、同時に、世界を均質に覆い尽くそうとする文化動向に対する地域的な批評行為でもあった。さらに言えば、西欧から見ると、日本という辺境で起きた建築の新しい「種の爆発」のようにもみえた。

ケネス・フランプトンは、このような地域からの文化的批判行為を「ポスト・モダニズム」や「コンテクスチュアリズム」と関連付けながら、「批判的地域主義」という言葉で表現し、西欧文明の大きな流れのなかの副流として位置づけた。けれども、「今」という場からみると、それは副流ではなく西欧文明という「レジーム(体制)」の解体の予兆であったのではないか。つまり西欧文明が生み出した「アーキテクチャー」が相対化され、新しい概念が登場しつつあったのだと思う。槇文彦は、そのモダニズム以降の時代感覚を「漂うモダニズム」という論考で観測している(二四二頁)。

このレクチャーシリーズでは、独自の動向を展開しつつあった日本の七〇年代の建築的冒険を再録し、そこからあらためて未来を展望することを狙った。会場となったギャラリー

IHAの主宰者であり、自身も七〇年代の冒険者である長谷川逸子の意向もあって、現在三〇歳代前半の若い建築家とのクロスダイアログとし、タイトルは「一九七〇年代の建築的冒険者と現代の遺伝子」とした。結果として、七〇年代から継続する、西欧文明発の一方的な批判的地域主義を乗り越える新しい概念が示されたと感じている。そこで本書のはじめとして、七〇年前後から今日に至る建築界のクロニクルを記しておきたいと思う。

一九六八／一九七〇

楨文彦による「漂うモダニズム」では、一九七〇年頃までの建築は、誰もが同じ大きな船に乗っていたが、七〇年代を境にその船から大海原に投げ出され、一人ひとりがバラバラに泳ぎ始めなくてはならなくなったというイメージが書かれている。そのきっかけとなったのが一九六八年のバリの五月革命である。それは学生を中心とした既成制度への異議申し立てであり、アメリカを頂点とする資本主義社会と、それがもたらす文化の均質化に対する抵抗運動であった。

当時の日本は、産業が急速に拡張して世界で最も洗練された工業技術をもつ国となり、一九六八年には国民総生産(GNP)がアメリカに次ぐ世界第二位の経済大国となった。また、敗戦後に制度的に移入された近代的政治である民主主義や近代的生活様式が定着しつつあった。そこでは、建築以外の、演劇、音楽、アート、デザインなどの分野でも、寺山修司、荒

川修作、倉俣史朗、三宅一生、武満徹、横尾忠則といったリーダーが登場した。同時に、彼らの活動を共有し批評を行なう、吉本隆明、多木浩二ら、思想家や評論家も現れ、多様なメディアがその状況を活発に社会に伝えていた。新しい世界観は多種多様な活動が同調し、互いに影響し合いながら形づくられていく。この時代、近代システムや資本の巨大化が社会を抑圧し始めた状況のなかで、まるで宙吊りにされた解放区のように文化的空間が出現していたのだ。

磯崎新の「建築の解体」は、一九六九年から『美術手帖』で連載が始まった。それは、当時の革命的言説と連動するように、それまでの日本の建築界に幕を下ろし、主役が入れ替わることを示しているように思えた。また、一九六八年に創刊された『都市住宅』は、古い枠組みを乗り越える建築の出現を伝えるメディアであり、若い世代はこれを通して新しい建築の動向を吸収していった。この表紙の企画は磯崎新が担当していて、まるで建築的マニフェストを宣言するポスターのようでもあった。そして一九七〇年、この革命劇の大団円のように大阪万博が開催される。おそらく一九六八年から七〇年に至る時期は、新旧の時代が入れ替わる臨界点であったように思える。

平和な時代

一九七〇年代の日本は、経済的に緩やかな成長基調を保ち、豊かな時代を迎えていた。そ

れまでは国家や特権階級しか許されなかった「建物をつくる」という行為に一般市民も参加できる社会が実現した。それは、第一次世界大戦後モダニズムの黎明期のヨーロッパで豊かな市民階級が登場し、ル・コルビュジエが彼らをクライアントとして実験的な建築を生み出していったのに似て、一般市民がさほど実績のない若い建築家に住宅設計を依頼するという環境が整い始めていたことを示している。この若い建築家たちこそ、本レクチャーの主役である「平和な時代の野武士達」なのだが、この背景には一九六八年から七〇年に至る時代の切断を経て、建築的冒険を支える社会が実現し、彼らの建築を受け入れる新しいクライアントが存在したことが考えられる。つまり、建築は社会を管理する側ではなく、文化的意識をもった市民の表現としてつくられるようになり、さらに豊かな経済環境と多様な文化的背景のなかで先鋭化が加速したので。

一方、高度経済成長は急激な都市化を推し進め、都市部では土地が細分化されて、敷地が小さくなりながらも戸建て住宅が建てられる。この状況は、急激な経済拡張と都市膨張という社会環境の変化のなかで生まれている。第二次世界大戦後、西欧世界も同様の状況が観測されており、それに反応して多様な都市論が提出され、都市の構成単位である建築のあり方に影響を与えていた。それは結果的に、都市の変容に向けて提出された建築のアポリアに対する回答を用意することになった。

楨文彦による「平和な時代の野武士達」という論考は、まさに日本におけるこの様相を描写したものだ。

考えてみるとこの数年、外国からやってくる新しい建築の波は必ずしもポスト・モダニズムだけを標榜しているのではない。たとえば、ロッシ、クリエ兄弟たちのラシヨナリズムの運動も、レム・コールハースの最新書『Delirious New York』におけるマンハッタイン島論、ヴェンチュリーの『ラスヴェガスの教訓』、ヴェネヴォロの『近代建築の歴史』、コリン・ロウの『コラージュ・シティ』、アンダーソンの『街路について』、タフリーの『建築とユートピア』など、最近重要だと思われる図書はほとんどはすべて本質的には都市論ではなかったか。彼らは都市の文化を論じ、そこから建築の意味を探ろうとしている。米国のアイゼンマンの主宰する都市建築問題研究所の発行する雑誌『Opposition』も、英国の『AD』誌も最近の内容の半分以上はなんらかのかたちで都市の問題にかかわりあっている。

（『新建築』一九七九年一〇月号）

この考察のなかではさらに、本来は近代建築運動の本質は都市論であったにもかかわらず、日本ではオブジェクトとしての〈工学的建築〉を主題にしたために、都市が置き去りにされていると、日本における建築の特殊な状況が指摘されている。

一九八九／一九九一

一九八九年、ベルリンの壁が崩壊する。それはソヴィエト連邦を中心とする共産主義社会

の退潮を示していた。そして、一九九一年にソヴェト連邦が崩壊し、世界はアメリカ一国による覇権体制となる。資本主義に対抗する原理が不在となり、アメリカの巨大資本が主導するグローバルイズム経済という資本の暴走が始まる。日本ではこの間、一九九一年から九三年に、バブル崩壊という経済クラッシュを経験する。これとリンクして、表現としてのポスト・モダニズムは終焉し、金融資本主義の独占が始まり、建築はこの目には見えない経済原理を表象する一手段と変容していく。

一九七八年にレム・コールハースが『Delirious New York』(邦題『錯乱のニューヨーク』)を著して以降、同氏による『S.M.L.XL』以外、都市に関する重要な理論書は出ていない。建築における都市論はこの四半世紀空白である。それは、経済活動のためにつくられた「現代都市」の構造をさらに加速させ、金融資本を中心とする世界が求めるアイコンックオペジェとしての建築が主役の座を占めることになっていたからである。

そして現代

二〇〇八年のリーマンショック、日本では二〇一一年の三・一一を経験して、一九九一年から四半世紀後、人間の共同性や生活を主体とする都市や建築に目が向けられるようになっていく。気づくと、一九七〇年前後の時代とは異なる社会状況、それは人口が減少し、経済活動が停滞し、都市は縮減するという現実が眼前にある。都市の膨張期に「七〇年代の建築

的冒険」が行なわれたのは、社会状況の変異に対応するものであった。そして現代の都市は、七〇年代とは非対称的な変化の時代を迎えている。建築は都市によって定義されるとするならば、都市が大きく変化するとき、都市の行く末を知るためのヴィジョンとしての都市論が必要とされ、それに呼応して新しい建築が登場する。

一九七〇年代に提出されていた文明的な世界の危機意識、ひとつは地球環境の有限性であり、それは人間と物との関係を自然のなかに包摂する概念として再度検討を促すものだった。さらに、西欧文明を中心としない地域自律型の思想は、世界の多様性を認めるものとして継承されることとなった。さらに人間の営みを中心とする思想、例えば槇文彦から示された「共感のヒューマニズム」は、依然として重要な主題であることが確認されている。そして何よりも、われわれのなかに、巨大化し暴走を始めた経済が主導する都市の急激な変化に介入する術を手に入れられないまま、オブジェクトとしての建築に終始してしまった状況を批判的に止揚する態度が生まれ始めているのだ。

本連続レクチャーを通して、さまざまな階層で七〇年代から継続される都市や建築の問題群が浮かび上がり、それを貫くようにして回答を求める次の世代の胎動が感じられたと思う。詳細は本文を読んでいただきたい。

槇 文彦

漂うモダニズムと私

「漂うモダニズム」は、時・空間を自在に横断して、モダニズムという一〇〇年におよぶ旅程を俯瞰した論文である。その視座から日本の七〇年代の建築状況を世界タイムラインのなかで定義付けていただくことが、この連続レクチャーの座標軸になるだろうと考えた。なぜなら槇さんご自身がまさにモダニズムの中心にあって、日本の建築の動きにも深くかかわってこられているからだ。

ここでは、槇さんにモダニズム思想を基底としながら、六〇年代の動向、本連続レクチャーのテーマであり、槇さんが「野武士」と形容した七〇年代の建築家たちの時代、さらには現代の若手建築家たちが模索する建築について語っていただいた。そこに、私たちが進む道程のヒントがあるのでないだろうか。

■北山恒

I 建築家と建築空間の変遷

「野武士」誕生の背景

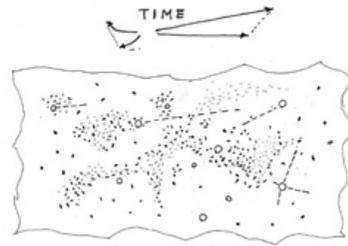
二〇一二年に『新建築』に「漂うモダニズム」という論文を寄稿しました(二四二頁)。ここでは、現在の建築は、西欧を中心とした普遍語であるモダニズム建築が行き詰まり、まるで大海原に投げ出されてしまったような状況にある、しかしこうした時代だからこそ「建築とは何か」を問い直し、新しい建築を生み出せる可能性があるのではないか、というようなことを語りました。私自身は、どのような時代にもその時代にふさわしい「共感のヒューマニズム」が存在し、建築はそれを体現するものであると考えてやってきました。

今回、北山恒さんがレクチャーシリーズを構想するにあたって、この論文を参考にしてくださったと聞きました。そこで私は「漂うモダニズムと私」と題して、自分の経験を通してモダニズム建築をパースペクティブとして語りながら、その結果として、これからの建築や建築家像がおぼろげながらも見えてくることを希望しています。

私は東京大学で丹下健三[*1]先生から建築を学んだ後、ハーバード大学に留学してホセ・ルイ・セルト[*2]に師事しました。二人ともル・コルビュジエ[*3]に強い影響を受けていました。そのコルビュジエは、一九二八年からCIAM(近代建築国際会議)[*4]を主宰し、当時第一線で活躍していた建築家を招聘して、モダニズム建築や都市について語り合う場を設けていました。その後一九五三年には、CIAMから若い建築家がTeam X(チーム・テン)[*5]を立ち上げます。メンバーにはアリソン&ピーター・スミッソン夫妻[*6]、アルド・ファン・アイク[*7]、ヤコブ・バケマ[*8]らがいました。こちらは共通する建築的課題や互いの作品を批評し合うような、CIAMよりも自由な雰囲気でした。同じ頃一九六〇年前後の日本では、大高正人さん[*9]、菊竹清訓さん[*10]、黒川紀章さん[*11]を中心にメタポリズム運動[*12]が興って、六〇年に東京で開催された世界デザイン会議[*13]でマニフェストを発表したり、実作を通してメタポリズムの精神を表現したり、出版活動を行なっており、私もメンバーの一人に加わっていました。

私はとても幸運なことに、当時の世界的な建築家たちの薫陶くんたうを受け、建築界の運動に参加する機会に恵まれたのです。その中心がコルビュジエであり、誰からも尊敬されていました。彼の影響力はとて大きく、建築にとどまらず風貌やスタイルにもおよんでいて、当時の建築家はみんな彼の真似をして蝶ネクタイをしていたほどです。

「漂うモダニズム」に話を戻しますと、一九七〇年頃まで建築家たちは、巨匠もそうでない人も、敵も味方も、ひとつの大きな船に乗っていました。その船がどこに向かっているのかわからなくても、とにかくみんなで一緒に進むのだという感覚があったのです。ところが、



大海原を表現したダイアグラム

七〇年代以降、その船はなくなってしまい、一人ひとりが大海原に投げ出され、どこかに向かって泳いで行かなければならなくなった。なかには、時代はポストモダンだからといって歴史主義に向かったり、地域主義が模索されたりといろいろな建築が登場してきました。時々キラッと光る建物が出てきたりもしましたが、それを目がけて一斉に進むかというところでもない。小さい潮流がいくつもあるといった状況で、かつての大きな船にみんなが一緒に乗っていた時代とは明らかに違っていました。

当時、チャールズ・ジェンクス[*14]に会ったときに、私は彼にこんなことを言いました。

「以前は喧嘩の相手と一緒にやろうという奴がいた。ところが七〇年代以降になると、敵もいないけど味方もいない、そういう状況ができてきたのではないか」。彼はその言葉に大きく心を動かされたようでした。

その後、一九七九年に当時『新建築』の編集長だった石堂威さんから、小さい建物だけ、おもしろい建築をつくる人たちがいるから、彼らの作品を見て批評してほしいという依頼を受けました。そしてまとめたのが「平和な時代の野武士達」という論文で、富永譲さん[*15]、長谷川逸子さん、相田武文さん[*16]ら、当時の若手建築家たちの、主に住宅作品を紹介しました。そのなかで、私はこんな一説を書いています。

時に田園に、また時として猥雑な都市環境の中に突如と現われ、独りたたずむ彼らの建築の姿は(中略)、孤立した点の建物群と、対称的な古来からの日本の風物、そんなことを思い比べていた時私は彼らの背後にふっと戦国時代の野武士の像を見たような気がした。野武士は主を持たない。したがって権力も求めない。(中略)しかし野武士たちは芸熱心(デザイン熱心)である。だから常におさおさ自分の芸を琢磨するに怠りない。それが主を持たない彼らの唯一のアイデンティフィケーションであり、命の糧であるからである。

(『新建築』一九七九年一〇月号)

ここでなぜ「野武士達」と名付けたかというところ、それは日本の建築家の生態が少しずつ変わってきていると感じたからです。一番の理由は、彼らは、戦国時代の野武士のように特定の「主」、つまり「師」をもたない。私たちの世代は、例えば東京大学丹下研究室の場合は、門下生として浅田孝さん[*17]、大谷幸夫さん[*18]、私、磯崎新さん[*19]、黒川紀章さんらがあり、このように出身大学や師事する教授を中心とするつながりがありました。ところが、富永さんや長谷川さんの世代は特定の師をもっていない。そこで「野武士」という言葉を使ったのですが、それが意外と受け入れられてその世代の建築家を象徴するような言葉になりました。ここで重要なのは、野武士というのは作品のスタイルではなくて、建築家としての生態を表していたということです。